

造づけるものは「時間」だけではない。また「個人の生活時間構造すなわち「家庭生活時間構造」でもない。総合的、立体的視点からの「構造化」が期待される所以である。

2. 諸文献、各種社会調査結果資料（含、実態調査、統計調査）などによる考察。

3. 今回は、そのうち

① 「家庭生活」を構造づける「要素」としては、どのような事項が考えられるか。およびその理由。② 「要素」が、どのような「交錯」、「関連」、において構造づけられるか。についての考察を中心に発表する。

D-5 家庭生活構造に関する一考察

福岡教育大 平田 昌

1. 家政学は、「家庭生活の改善と向上とに資する学問」といわれている。とすれば、「家政学」では、「家庭生活」を、自明の語、概念、とせず、科学的に客観化することを出発点とする必要がある。また「生活」である限り、客観化において、平面的局部的概念規定のみでは不十分であることももちろんである。筆者は、すでに、日本家政学会、同九州支部会、日本家庭科教育学会において家庭生活の本質に関する一連の考察（No. 1—No. 7, 生活行動的側面、生活技術との関連近代家族機能との関連、現代の家族解体的諸現象との関連……）を発表した。今回は、それらの基盤に立って「家庭生活の生活構造的考察」を試みた。「生活構造」としては、すでに「時間構造的把握」などがいわれている。だが、「家庭生活」を構